

1950年莞島と1980年光州の記憶を聴く

金元
金閔愛 訳

目次

- 1 ある死に出会う：2011年冬
- 2 事件と初出会い、光州と古今面
- 3 所安島と古今面に訪れる
- 4 チェ・ワンジュとの出会い、より近く死のそばへ行く
- 5 再び事件と向き合って

1 ある死に出会う：2011年冬

本研究は2011年下半年から2012年の冬まで、1980年5・18 当時起きた、ある家族の殺人事件についての手掛かりを探していくプロセスを「時間」にそってまとめたものである¹。本稿では、1980年5・18と一家殺人事件という「特殊な事件」を追う二人の研究者の旅程と問題意識の変化について、現地調査と口述資料収集という文脈から「復記」²し、韓国の民主主義の象徴であり、80年代韓国民主化運動の資産であった80年5月に起きたある事件が、冷戦という東アジアの時間帯と「通時的に」重なっていたことを試論的に提示していきたい。

ほぼ同じ時期に大学院生活を過ごしたキム・ジョンハンが、2011年冬、ある飲み屋で一つの提案をしてきた。それは、「5・18 当時の一家殺人事件」についての調査。5・18で博士号を取ったキム・ジョンハンが、莞島古今面が故郷である義父キム・テアム詩人から聞いた、ある興味深い事件について話をしてくれた。

* 本研究は、2012年度5・18記念財団の支援による研究で、『口述史研究』2013年9月号に乗ってものを短く修正したものである。この研究は高麗大学校民族文化研究員キム・ジョンハン教授と共同で口述調査を進行し、全体的な進行と議論について調律した。本研究のために口述調査を進める過程で、大いに助けていただいた詩人キム・テアム先生と所安抗日運動記念事業会のイ・デウク先生にこの場を借りて感謝申し上げたい。

¹ この研究の1次記録と解釈は、一緒に調査をした召正翰（2013）によってできた。

² 復記ということばは、過去に起きた事実、記憶などを調査して、再び省察的に記録するという意味として用いた。

1980年5月26日、光州市東区鶴雲洞で、チェ・ドッチュン（不動産紹介業）一家3人が殺害された事件が起きた。当時の新聞記事および警察によると、一家殺人事件の犯人はチェ・ドッチュンの長男チェ・ Cholである。チェ・ Cholは5月26日夜明けの4時10分ごろ、寝ていた父と継母キム・ソレ、チェ・ヒョン、3人を銃で乱射し殺害した。彼は光州抗争の示威に参加し、その中でカービン1挺を手に入れた。そして、5月25日に、銃を持ってそのまま家に帰ってきたが、父チェ・ドッチュンから「お前なんかなぜ銃を持っているのか」と叱られ、それが普段自分を差別していた継母についての怒りと重なり、家族の殺害まで至ったと言う。

新聞によって名前と年齢、事実関係に少し差異はあるものの、基本的な流れとして、5・18光州抗争で示威に参加したチェ・ Cholがカービン小銃を入手し、父チェ・ドッチュン、継母キム・ソレ、腹違いの弟チェ・ヒョンを銃の乱射で殺し、その殺害動機は家族の間における怨恨であると述べられている。幼いときから朝鮮戦争について、いろんな話を聞きながら育ったキム・テアム詩人は「本当にこの事件は怨恨による殺人だろうか」という疑問を提起した。つまり、単純な個人の怨恨ではなく、東アジアの冷戦が本格化となった朝鮮戦争期、莞島における左右対立、良民水葬事件、左翼索出、そしてそれらによる家や家族の間の怨恨などと関連する問題ではないかと、彼は疑問を抱いたのである。

このようにとても興味深いテーマであったが、どのように事件に接していくのかがまったく分からなかった私たちは、とりあえず二つの方向を決めた。一つは5・18当時、チェ・ Cholの事件についての資料を探ること、もう一つは莞島でチェ・ドッチュンに関する資料を見つけ出すことである。一家殺人事件についての資料は、新聞、戒厳司などの資料がいくつか見つかったが、一部の事実関係を除いて、大同小異であっ

た³。そのほとんどが「継母と父に対する怨恨」と絡んだ殺人という解釈であった。5・18 と関連する資料はそれ以上の進展はなかった。さらに事件当時、チェ・チョル（1979 年入隊、死亡当時 21 歳推定）は軍人（防衛兵）の身分であったため、軍事裁判に回付され、裁判記録は陸軍法務室で特別管理されていて、直系家族以外は閲覧できないように制限されていた。つまり、第 3 者の裁判記録閲覧は根本的に封鎖されていたのだ。私たちは法務部に限らず、知り合いの法曹人を通じて資料を探そうとしたが、結果は「失敗」だった。

ところで、思いもよらなかった資料の中から「手掛かり」が見つかった。それは「真実和解のための過去事整理委員会」（以下、真和委）の報告書であって、朝鮮戦争の前後に起きた莞島地域の虐殺について「莞島郡民間人犠牲事件」（『2009 年上半期調査報告書』2010 年、3 巻）という詳細な報告書がすでに刊行されていた。チェ・ドッチュンの故郷である古今面を含めて関連資料を探していたところ、ついに「チェ・ドッチュン」という名前が見つかったのだ。それも「左翼関連事件」と関連するもので、その中にはオ・スンヨンという名前の被申請者が真和委へ受け付けた内容も入っていた。その内容を見てみると、以下のようである。

○ター2340号 オ・スンヨン

オ・スンヨン（1919 年生、古今面徳岩里）は古今支署の臨時職員として勤務していたが、左翼嫌疑で古今支署に連れられて来た自分のいとこの義理の弟チェ・ドッチュンを逃してあげたと誤解された。これによって、オ・スンヨンは警察に逮捕され、1951 年 2 月末、古今支署で拷問を受け帰宅した 1951 年 3 月 2 日、拷問後遺症によって家で死亡した。母からその話を聞いたというオ・スンヨンの息子オ・グァンテは「父は支署に拘禁され、唐辛子の粉が入っている水による拷問を受けた。母がご飯を運び、墓は村にある。チェ・ドッチュンは戦争と関

係なく、後で死亡した」と陳述した（真実・和解のための過去事整理委員会 2010：594、強調は引用者）。

父が不当に犠牲になったと陳述するこの資料によると、チェ・ドッチュンは朝鮮戦争が起きた 1950 年 6 月 25 日から 1951 年 2 月の間、ある時点で全羅南道莞島郡古今面で左翼嫌疑で逮捕され、釈放されたようだ。オ・スンヨンの資料が見つかったことによって、私たちの研究は急進展した。確実ではないが、チェ・ドッチュンが莞島古今面で解放直後と朝鮮戦争期に、「一連の左翼活動」と関連していたかもしれないという心証が得られたからだ。しかし、莞島と古今面、そして所安面関連資料では、これ以上チェ・ドッチュンと関連する事実を発見することはできなかった。が、少なくとも 1980 年 5 月一家殺人事件が解放直後のチェ・ドッチュンの一連の行跡と関連していることについては確信した。

それで、私たちは二つの可能性を念頭に置き調査を進めた。まず一つ目は、チェ・ドッチュンは解放直後左翼活動をして、これによるチェ・ドッチュンの家族の没落が 1980 年 5 月の一家殺人事件と関連しているかもしれない。二つ目、チェ・ドッチュンが左翼活動をしたあと、1950 年代以後から光州に移って暮らす中で、彼と彼の家族の間に殺人事件を招くような何かの変化があったかもしれないと考えた。これは、新聞資料の「怨恨による一家殺人事件」という問題の淵源かもしれない。本研究の流れを理解するために、チェ・ドッチュンを中心とした家系図を下にまとめてみた。

【チェ・ドッチュン家系図概要】

■チェ・ドッチュンの兄弟

チェ・サンチュン（長男、死亡）

チェ・ドッチュン（次男、80 年死亡）

チェ・ワンヒ（長女、死亡）

チェ・ワンジュ

（次女、80 年事件当時一緒に居住）

チェ・ウチュン（三男、死亡）

チェ・ウンジュ（三女）

³ 新聞、記者の記録、証言などに部分的に記録された一家殺人事件についての批評は김정환（2013：365-371）参照。

- キム・ダンヒ（一回目の結婚、1955年）
一チェ・ Chol（長男）
- コ・ヒョンジャ（事実婚、1960年代推定）
一男出生（名前および生没未確認）
- キム・ソレ（二回目結婚、1963年推定）
一チェ・ヒョン（次男、80年死亡）
チェ・ウンジャ（長女）
チェ・ミョンジャ（次女）

※本研究では、チェ・ドッチュン、チェ・Chol、チェ・ヒョン、キム・ソレなど死亡者を除いた人物の名前は、本人らの希望および身元の保護のため「仮名」で表記した。

しかし、朝鮮戦争のあと、とりわけ 1980 年事件直前のチェ・ドッチュンの生涯と行跡は、妻キム・ソレと二人の子供、みんなが死亡した状況の中で、直系家族だけが話できるだろうと判断した。ただ、研究者として私たちが心配したことは、30年の歳月が経て、やっとその傷口が治りかけ、忘れられていく事件について話をしてもらうことが果たして「妥当なのか」ということであった。これは倫理的な側面だけではなく、ある個人の現在の生活とも関連しているため、もう少し時間をかけて慎重に考えようとした。私たちの研究の水先案内人であるキム・テアム詩人も、同様な考えであった。

その代わりに、「迂回路」ではあるが、チェ・ミンソン（1927年生、85歳、チェ・ドッチュンの従姉）をインタビューしようとした。チェ・ミンソンとの対話を通じて、朝鮮戦争前後の時期におけるチェ・ドッチュンの生涯について聞き、これに基づいて研究を進めようとしたのだ⁴。

⁴ 2012年4月28日安養でとったチェ・ミンソン（チェ・ドッチュンの従姉）のインタビュー内容は、チェ・ミンホ、チェ・ワンジュの口述と重なるところが多いため、紙面の都合上省略する。チェ・ミンソンは、1948年古今支署襲撃事件当時、チェ・ドッチュンをかくまっただけで、戦争の後はチェ・ドッチュンとキム・ダンヒの結婚にも関わった。

2 事件と初出会い、光州と古今面

2012年4月28日、チェ・ミンソンとの出会いによって、私たちは微かではあるが、朝鮮戦争期とその後のチェ・ドッチュンの生についての手がかりを見つけることができた。そして、彼の生涯についての問いはより深くなっていった。とくに莞島と古今面、そして所安島に関する資料を調査するにつれ、よりそうなっていた。

チェ・ミンソンの口述内容を確認・補完するために調査した資料によると、莞島地域の現代史は朝鮮戦争を境界に、いくつかの時期で分けることができる。まず、朝鮮戦争以前の状況を整理すると、1945年8月21日に建国準備委員会（以下、建準、委員長ナ・ボンギョン）が組織され行政権を掌握した⁵。9月22日には、建準が改編され、莞島郡人民委員会が結成された。人民委員会は所安面出身のシン・グァンヒが組織を主導し、後に登場する所安出身のウィ・ギョンリャンが警察署長を務めた。ところで、11月になって莞島、海南、珍道、康津で米軍政の開始および人民委員会関連者の逮捕が始まった。翌年、1946年3月になると莞島郡における左・右翼の衝突が一応終息を告げる。これは、左翼の公開的かつ組織的な活動は終了し、南朝鮮労働党や朝鮮民主青年同盟などの地下活動が始まったということの意味する（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010: 561-562）。

以後、左翼陣営は各面単位の米軍政反対集会、1947年3・1記念集会、5・1メーデー集会（強制供出反対および土地無償没収一無償分配を主張した“シンジ暴動”）、8・15記念集会、1948年単独選挙反対集会などを組織した（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010: 597）。チェ・ミンソンが記憶するチェ・ドッチュンが関わった古今支署襲撃事件も、1948年3月と12月に二回起った。こうした一連の闘争過程で指名手配者らは菓山面海東里コンゴジ山に隠れたり、陸地へ逃げ込んだ。警察はコンゴジ山、所安面における左翼逮捕作戦を実施し、また左・右翼の衝突の過程において、1948年金塘面/薪智面の

⁵ ナ・ボンギョンは、莞島邑出身で、1928年、宋乃浩がソウルのセブランス病院で死亡した後、彼の遺体を所安につれてきた人物である。

ハンカチ事件⁶、1949年金塘面「麦一升事件」⁷など左翼の人々を手伝った住民らが犠牲となった。

こうした虐殺は、朝鮮戦争以後にも絶え間なかった。戦争が始まって1ヶ月が経った1950年7月23日に人民軍が光州を占領したあと、全南西南部警察は長興に集結し康津と長興を拠点として反撃を図った。しかし、7月25日人民軍が求禮、順天、麗水など、莞島郡の島嶼地方を除いた全羅南道西南部の陸地をすべて占領した。人民軍が南下中であるという噂が広がり「莞島で人民軍と接戦が起る」など、莞島の民心は激しくざわめいた。人民軍によって孤立された警察は、島嶼地方に拠点を置き、抵抗するために8月1日莞島邑に全警察の集結を命じた。このように莞島を中心に戦線が形成されることによって、莞島で左翼嫌疑がかけられていた住民の一部は、警察の脅威から逃げ、海南郡南倉港の人民軍に加わった。また、少なくない住民が周辺の離島へ避難していった（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010 : 562-563）。

1950年9月14日、人民軍の総攻撃によって警察は青山島、巨文島へ後退し、人民軍の莞島統治が始まり、莞島郡人民委員会、保安署が設置された。ウィ・ギョンリャンもこの時期に再び莞島に登場した。このように朝鮮戦争の開戦から莞島が人民軍の統治下に入る時点まで、警察の移動経路は「莞島邑⇒青山島⇒蘆花島⇒所安島⇒麗瑞島」順に推定される（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010 : 565）。

しかし、人民軍の莞島統治はわずか半月ほどで終わった。9月30日、仁川上陸作戦を感知した人民軍は海南郡南倉港へ後退した。この過程で、人民軍は留置場に拘禁されていた右翼

48人を水葬し、後退する際に、国連軍が上陸したら莞島が火の海になると、四方50厘の外へ避難することを促した。莞島住民の大規模の避難と本島復帰は、後に起った大量の虐殺の原因となった（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010 : 565-566）。

朝鮮戦争を前後とした莞島の虐殺について調査しながら、「果たして1945-53年の間に起ったことは、チェ・ドツチュンと家族にとってどのような影響を与えたのだろうか」、また「朝鮮戦争直前と直後、二回にわたった検挙と死の前で、彼が生き延びることができたのはなぜだろうか」という疑問を抱いた。朝鮮戦争の直前、チェ・ドツチュンが介入した古今支署襲撃事件以後、多くの人々がコンゴジ山へ入った。そして警察はコンゴジ山に隠れている左翼を逮捕するために、住民を動員し、コンゴジ山を囲い、草を除去したあと、「コンゴジ山サントリ作戦」という、まるでウサギを追うような山狩り作戦を展開した⁸。このように朝鮮戦争の直後、人民軍の統治下での附逆嫌疑で、数多くの人々が適法な手続きを踏まず「虐殺」された。真和委の報告書によれば、農業と漁業に従事した251人の民間人が莞島警察と、警察の指揮、命令、監督の下にいた義勇警察、大韓青年団および全南西南部警察によって殺害された（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010 : 541）。1950年7月22日の莞島、海南地域における羅州部隊の「栄光作戦」が失敗したあと、7月26日羅州部隊は人民軍に仮装して、住民を掃討したあと、莞島中学校に侵入し、大量虐殺を起こした。この作戦は人民軍に装った軍人が莞島中学校に住民を集め、そのなかから附逆者を探り出し、所安面横看島の山の中で処刑したと知られている⁹。

このような虐殺は青山島に駐屯していた莞島警察が、本島と各離島を修復した直後の1950年10月1日から5日の間に起きた。住民は人

⁶ ハンカチ事件は、1948年金塘面と薪智面で、1947年メーデー集会の直後、薪智面と1948年3月と12月古今面支署襲撃事件、そして1949年夏、菓山面コンゴジ山と所安面で左翼勢力逮捕作戦の中で、住民らが左翼人士を手伝っていて、それによって犠牲になった事件のひとつである（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010 : 564）。

⁷ 麦一升事件は、1949年金塘面駕鶴里で左翼嫌疑で警察に追われていた人たちが山へ隠れていて、それを助けるために村の人びとが麦を一升ずつ集めていたことが発覚され、虐殺された事件である（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010 : 606）。

⁸ チェ・ドツチュンと一緒に1948年古今支署襲撃事件に参加した後、指名手配され、山狩り作戦によって逮捕されたイ・ギュセツは1949年2月に他殺された（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010 : 586, 597）。

⁹ 羅州部隊の虐殺については김호균（1993 : 140-144）参照。

民軍の後退後、家族、知人、村ごとに康津、長興などへ避難した。実際「避難」は青山島を除いて人民軍統治時期の附逆の可否とは関係なく行なわれた。莞島住民が陸地へ避難したあと、米軍と警察が故郷へ戻ることを促したら、青年らは長興有治山へ入ったり、長興と康津一帯で他人の家に住み込みで働いた。しかし、彼らの中で相当の数は「避難した人民軍附逆者」という罪名で虐殺された。一方、1950年10月から51年の春の間、陸地へ避難しなかった人々は、管内の支署に逮捕、自首一拘禁されたが、面単位で射殺されたり水葬されたり、または莞島警察署に移送されて射殺されたり裁判に回付された。

後に述べるチェ・ワンジュによると、チェ・ドッチュン¹⁰は朝鮮戦争の直後、面長のようなソン・ヨンジンとともに「郡首」の役割をしたようだが、正確な事実確認はできなかった。さらに、朝鮮戦争以後、チェ・ドッチュンの光州での生活についても把握しにくかった。私たちは、光州でチェ・ドッチュンの行跡を調べるために、キム・テアム詩人からチェ・ドッチュンの従弟チェ・ミンホ¹⁰を紹介してもらい、彼に会うために光州へ向かった。2012年5月22日、光州市に住んでいるチェ・ミンホの自宅を訪れた。チェ・ミンホは一人暮らしで、丈夫な体をしていた。到着したのが食事の時間だったので、ユッケビビンパを食べた後、私たちは彼の自宅で話を始めた。ところで、最初彼はチェ・ドッチュンとその事件について語ることを躊躇していた。30年も過ぎた、それも胸が痛くなる記憶を、わざわざ掘り出すことが、直系家族にとってはどれほど苦痛の話なのかをわかるのかと。しかし、それでも幼年期と光州でのチェ・ドッチュンについて少しずつ話し始めた。

チェ・ミンホとのインタビューは5月22日と9月26日、二回にわたって行なわれた。最初のインタビューでは戦争時期について詳細には話さなかったが、二回にかけて戦争と1980年5・18がつながるような話を色々してくれた。

まず、彼の話で注目される場所は、チェ・ドッチュンの左翼嫌疑についての話だった。チェ・ミンホは、チェ・ドッチュンは思想とは無縁だったと何度も繰り返して話した。チェ・ミンホの話は次のようである¹¹。

だから（チェ・ドッチュンは一引用者）、どんな思想的な関連は一つもありませんでした。幼かったとき、十いくつするとき、6・25のとき、加担したと言われるが、それは小僧の振る舞いであって、自分の思想によってやったことではない。ただ、そのとき、チョン・グァンテクとか（キム一引用者）ホジン、そのような人たちがみんな、成功しようとしたからそうなったんだよ（チェ・ミンホ、2012年9月26日）。

それは（チョン・グァンテクなど社会主義者らの影響を受けたかどうかは一引用者）わからないが、ともあれ問題点は暗々裏に夜になるとその人たちが集まって、そんな話しをして思想を注入しました。それで、何か思想の話しでもしようとする、「あ、それがどういう仕事なのかわかるの」って、無視したりしたんです（チェ・ミンホ、2012年9月26日）。

それとつながっていて、ヨンジン兄（ソン・ヨンジンのこと一引用者）が、歳も少ないのに、染められた。（社会主義思想に一引用者）染められた（チェ・ミンホ、2012年9月26日）。

たぶんソン・ヨンジン、その人とキム・ホジン二人に（チェ・ドッチュンが一引用者）たぶらかされて、なんか学校へ通うと行って（行っているのを一引用者）、やった（戦争直後莞島に呼び出した一引用者）らしい。それで、（左翼側に一引用者）落ちたはずだ。私も6・25の後、連れていかれて、一晩か二晩で過ごしてから出てきまし

¹⁰ チェ・ミンホは1930年生で、口述当時82歳だった。彼はチェ・ドッチュンの従弟で光州では日常的に会ったと言う。

¹¹ 以下、本研究において口述資料を直接引用する際には（口述者名、口述インタビュー、年度、月日）順で表記する。そして、すべての引用において、強調のための下線は引用者によるものである。

た。その兄のせいで（チェ・ミンホ、2012 年 9 月 26 日）。

チェ・ミンホはチェ・ドッチュンが左翼思想とは関係なく、解放当時、莞島地域の代表的な左翼活動家だったチョン・グァンテクとともに活動していたソン・ヨンジンの「たぶらかし」または「思想注入」によって「染められた」「火遊び」だったと、チェ・ドッチュンの左翼活動の意味について解釈した。チョン・グァンテクは後述するウィ・ギョンリャン、鄭南局など、莞島地域の代表的な民族解放運動家たちとともに日本で活動したあと、解放直後莞島に帰還した。彼は 1927 年ウィ・ギョンリャンの自宅で結成された、莞島地域秘密決死「一心団」に加入し活動した。一心団は「朝鮮、日本、中国、東洋 3 国を舞台として闘争」しようとして決意した団体で、チョン・グァンテクはウィ・ギョンリャン、キム・ジャンアン、イ・ウォルソンなどと一緒に日本へ派遣された（박찬승, 1993 : 91）。当時の新聞記事を見ても、チョン・グァンテクは 1927 年 5 月 16 日所安学校の廃止に対抗して、検束、取り調べを受けたと記録されている（中外日報 1927 年 5 月 16 日付、5 月 26 日付）。つまり、チョン・グァンテクは 1920 年代には所安学校とかかわる運動を展開していて、1920 年代後半ごろ日本へ渡り、解放直後莞島へ戻ったと推定される。

チェ・ミンホの証言によると、チェ・ドッチュンはおばの息子ソン・ヨンジンとよく付き合っていて、ソン・ヨンジンはチョン・グァンテクの影響を強く受けたと言う¹²。現在チェ・ミンホが考えるには、チェ・ドッチュンの二回にわたる左翼活動はちょっとした「小僧」（世の中の恐さを知らない子供—引用者）の過ちに過ぎなかったし、だから釈放されたと解釈した。しかし、1948 年当時、チェ・ドッチュンの年齢は 20 歳だった。60 年前の社会的な年齢を考えると、

¹² チェ・ドッチュンと同様に、当時日本や陸地で上級学校に通った人が莞島に居住する場合、朝鮮戦争が勃発した直後「あなたはたくさん学んだから活動をすべき」だと、左翼活動をさせられる場合があったことを、パク・ソンギョ（1950 年 11 月頃、死亡推定）の事例から確認できる（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010 : 590-591）。

20 歳は青年であり、チェ・ドッチュンは光州の朝鮮大学校附属高等学校に通っていた、地域のエリート層に属する。チェ・ミンホのことば通りに「仕方なくやったこと」として決め付けることはできない。

むしろ、チェ・ドッチュンが二回の検挙にもかかわらず、生きのびたことは「非常に例外的な場合」だったと言えるだろう。「天運」といっても良いだろうか。1948 年古今支署襲撃当時、関連者のほとんどは射殺された。資料によると、警察と義勇警察による左翼や附逆者に対する処罰および虐殺は、

1947 年 5 月 1 日メーデー集会の時点

朝鮮戦争勃発後

人民軍進入以前

1950 年 10 月の莞島郡地域修復以後

このように時期区分ができる。真和委の調査報告書では、莞島郡管内の附逆嫌疑者は総 1,160 名で、その中に射殺一処刑者は 323 名、約 28%に至ると書かれている（真実・和解のための過去事整理委員会 2010 : 557）。1954 年の莞島警察資料（『警察沿革史』）によると、1947 年のメーデー集会以後、集会参加などを理由に法的な手続きを踏まず（即決処分）海に水葬されたり、支署、莞島警察署の近辺で殺害された民間人の中で、確認された人数は、

・所安面 附逆者 125 名

左翼嫌疑による死亡者 53 名

・古今面 附逆者 343 名

左翼嫌疑による死亡者 52 名

・莞島邑 附逆者 299 名

左翼嫌疑による死亡者 20 名

であった（真実・和解のための過去事整理委員会 2010 : 558）。

さらに、真和委調査報告によると、李承晩政権の目の敵になった人が被害にあった場合、修復直後莞島警察や義勇警察、大韓青年団などによる処罰および虐殺された場合、家族の中に左翼嫌疑者がいて処罰を受けたり拘禁される場合、戦争勃発初期、国民保導聯盟に加入し処罰を受けた場合、そして人民軍統治の下で支署、夜警団活動などで虐殺される場合も存在した。

このように些細な理由で虐殺が行なわれる場合が多かったのにもかかわらず、チェ・ドッチ

ユンの場合、棒を持って来いと言われて行ってみたら、急に支署の襲撃が始まったので、トイレに隠れたあと、姉の家へ来たところだと言いついて災いから逃れたようだ。結局、彼を逮捕した青年団員らが、チェ・ドッチュン若くて、分別がつかないだけで、思想があつてやつたことではないと見逃してくれたと言う。また、1950年9月朝鮮大学校附属高校に通う途中、再び莞島へ呼び戻されたチェ・ドッチュンは、約半月ほどで人民軍が退却したら、山へ逃げこんだ。しかし、飢えに絶えられず、下山し、親戚の家でご飯を食べているうちに検挙された。チェ・ミンソンとチェ・ミンホの記憶によると、今度の事件でチェ・ドッチュンを助けたのは、一番目の妹チェ・ワンヒだった。古今支署の署長は美人だった彼女に、兄を助けたければ自分の言うことを聞くようにと説得し、結局チェ・ワンヒが兄と家族のために「犠牲」になったのだ。その妹は自殺まで図ったが、後にチェ・ドッチュンと一緒に事業をしたパク・ヨンボの妾になったと言う（チェ・ミンソン、2012年4月118日）。それだけでなく、逃避過程でも二番目の妹チェ・ワンジュは白刃の下をくぐりながらも、チェ・ドッチュンの隠れ場を警察に教えなかった。

私は（兄の隠れ場の話しを一引用者）しなかったです。義理があるからどうしても教えられなかった。待っていた答が出ないから、嘘だとまた連れて行かれ、また殴られ。恐かった。それでも、最後まで教えなかった。最後まで教えなかった。よくやった。私が教えてしまったらそのとき（ドッチュン兄は一引用者）死んだよ（チェ・ワンジュ、2012年9月26日）。

二つ目に、チェ・ミンホのインタビューから注目されることは、「チェ・ドッチュンの変化」についての内容である。チェ・ミンホは、チェ・ドッチュンが息子チェ・チョルを厳しく育てた話しをするたびに「人間が変わった」と何回も繰り返し言及した。時期的に解放直後のチェ・ドッチュンと、軍隊の除隊後のチェ・ドッチュンに「対照的」な話が広げられた。若かつ

たときのチェ・ドッチュンは文学、書体、賢い、人情深いなどのことばで表現された。反面、朝鮮戦争のあと、軍隊に行ってきて、結婚をしたチェ・ドッチュンは「性格が悪い」、「財物欲」など利己的な人物として語られた。チェ・ミンホの話しを見てみよう。

（ドッチュン兄を一引用者）私たちはついていけないほど、文学的な才能がありました。（中略）小説を書いて、兄が私に、とても文学的な才能が（あつた一引用者）そう。（詩も書いておじの所へ行ったり一引用者）詩はよくわからないが、とても文学的な才能がありました。そして、字がすごくうまい。書体がとても良かった。私は大学に通っていたときだが、その兄の書体は越えるものではなかった。本当に書体がうまかった。話も上手だし、また背も私より高く（チェ・ミンホ、2012年6月29日）。

継母（キム・ソレのこと一引用者）が虐待したと言うが（チェ・チョルが殺人をしたと新聞で報道されたが一引用者）、継母は、その兄嫁はすごく良い人でした。人が良くて絶対（息子チェ・チョルを一引用者）虐待なんかする人ではなくて、兄がそんなに性格が悪くて、間違えると直ちに嫌だと言ったよ。その兄嫁はそういうことはなかったです。うん、とても人が良くて、絶対息子を虐待するようなそんな人ではなく。（兄が一引用者）結構あんなに性格が悪くて、そんなに人が変わってしまいました。結婚する前にはそうじゃなかったのに。変わってしまって、財力ができて、社会的な地位のようなものを担うための力を得るために人が変わってしまって。ふるさとにいたとき、消防所長もしたりしました。うん、それもしばらくやったでしょう（チェ・ミンホ、2012年9月26日）。

（チェ・ドッチュンは一引用者）若かつたときはすごく良い人でした。穏やかでよく笑い、いたずらもしたり、本当に良かった

のに。なんかこんなに結婚して、財欲が出てきたら、人がそうだったよ。私も他人のように豊かに暮らしたい。そうした財欲が出てきたらしい（チェ・ミンホ、2012 年 9 月 26 日）。

そうだとすると、こうしたチェ・ドツチュンの「変化」をどのように理解すべきだろうか。チェ・ドツチュンの光州での生活は、朝鮮戦争を前後とした時期とかなり異なった。私たちは、彼が 1980 年当時「仲介業」に従事していたことを記事によって知った。チェ・ミンホは「縫工場⇒カツラ工場⇒漫画店⇒不動産仲介業」へ至るチェ・ドツチュンの職業変遷について話しをしてくれた。それぞれの職業と工場、店の運営は、その時期に流行っていた時流に乗るようなものであった¹³。おそらくチェ・ミンホがこのような説明をした理由は、チェ・ドツチュンは利口に自分の生き方を変えようとし、それは凋落したチェ氏家で、彼が生きのびるための方法だったかもしれない。

3 所安島と古今面に訪れる

チェ・ミンホに会ったあと、私たちはキム・テアム詩人の紹介で、所安抗日運動記念館に立ち寄った。陸地で移動する古今面とは違って、所安島は船で 1 時間ほどかかった。5 月 22 日にも、その次の 9 月 26 日にも古今から所安島へ行く海の波は高かった。所安島へ到着してから車で 10 分かからないところに、所安抗日運動記念館 (<http://bizjhp.cafe24.com>、以下、所安記念館) があった。所安記念館は 2003 年に所安島の抗日運動を記念するために作られた展示空間である。展示空間の前には住民の募金で 1990 年 6 月に建てられた所安抗日運動記念塔があり、その記念塔の前面には、抗日民族教育の象徴だった所安学校校舎を再現した建物がある。小説家で歴史学者でもあった故イ・ギョンヨンが「解放の土、所安島」（『社会と思想』、1989 年 3 月号）の中で、所安島の抗日運動を紹介したあと、所安島は抗日運動、民族教育の象徴として認められた。1990 年代、全南大学

校の『島嶼文化』でも、所安島、古今島などを含めた島の文化や抗日運動などについての企画特集と、集中的な調査が行なわれた。

所安は「解放の島」だと言われるほど 1920 年代まで全南地域の民族解放運動の中心地であった。所安はほとんどが平民層、自作農であった。地主と小作人の間の葛藤は弱かった。とくに、所安は半農半漁で全国第 1 の漁業組合があり、住民の主な生計手段は海苔の養殖であった。1900 年代から活性化された海苔の養殖によって高所得が得られ、その所得に基づき、教育熱まで高まった（박찬승 1993 : 83）。それだけでなく、所安メンソン里は陸地の木浦を經由する済州島の船の寄港地であり、また大阪と仁川の間を行き来する外航船の航路も、釜山、麗水を経て木浦へ行く途中、所安島を通過した。こうした要因が所安の人々の渡日を有利にし、外部の情報と思想などが簡単に入ってくる背景でもあった（김인덕 1997 : 362 ; 박찬승 1993 : 84）。

とりわけ、所安の民族解放運動の中心には、1923 年設立された私立所安学校があった。所安住民らはこの学校を通じて民族運動家を養成した。1927 年には、所安学校をめぐって廃校－復校同盟－抗議組織化をやり続けたが、結局廃校となった。それ他にも、1920 年代の所安では多様な民族解放運動が展開された。代表的な組織を挙げると、倍達青年会（1920 年）、守義爲親契（1922 年）、秘密決死一心会（1927 年）、所安労農聯合大成会（1924 年）、思想団体サルジャ会（1926 年）などである¹⁴。これらの運動を主導した人物が宋乃浩、宋琪浩、鄭南局、崔亨天、姜正泰、ウィ・ギョンリャン、イ・ウォルソンなどだ。

展示室には倭人灯台事件をはじめ、各種の抗日運動を事件別に展示しておいた¹⁵。ミニチュアで作った所安学校などが目立つ。しかし、私たちが注目したのは所安の主要抗日人物の写真と経歴を紹介した展示であった。その中の主要人物がウィ・ギョンリャンと鄭南局であった。

¹⁴ 1920年代を中心とした所安地域の民族解放運動については、박찬승（1993 : 88-105）参照。

¹⁵ 1909年、唐寺島で東学軍イ・ジュンハなど、6人が灯台を襲撃し、日本人4人を殺害した事件を指す。

¹³ 詳細な内容は김정환（2013 : 374-375）参照。

宋乃浩で代表される 1920 年代の所安島の抗日運動は、1927 年に所安学校が閉鎖され、1928 年宋乃浩が死んだあと、古今面などへ中心が移った。1930 年代に莞島郡外面とともに新たな抗日運動の中心地域として浮上した古今面では、1920 年 1 月、イ・ヒョンリョル、チョン・ハッキョンなどが主導した独立万歳示威運動、1929 年イ・ヒョンリョルが指導した龍池浦干拓地闘争などが展開され、これに基づいて 1930 年代に共産主義理論を継承した崔昌珪、李基弘、李興刷¹⁶などが、全南運動協議会を中心に農民組合を結成しようとする農民運動を展開した（김정환, 2013 : 383）。

しかし、民族解放運動は所安島からほかの地域に移ったが、所安島出身の民族解放運動家らは相変わらず中心的な存在であった。とりわけ、1927 年の春景園党事件や全南運動協議会¹⁷、そして莞島から日本へ派遣された在日運動家の中で、解放以後にも名前が登場する人物が鄭南局とウィ・ギョンリャンである。記録によると、ウィ・ギョンリャンは 1907 年生で、1945 年解放当時 38 歳から 43 歳の間であったと推定される。彼は所安中和学園を卒業し、一心団団員そして全羅南道朝鮮共産党共産主義青年同盟に参加した。1927 年から、渡日および在日朝鮮人労働運動参加、ソウル青年会新義州事件のことで拘禁されるなど、所安と朝鮮半島、日本を舞台として活躍した。

また、同じ所安面出身の鄭南局（1897 年生）は 1919 年 3・1 示威を主導し、1922 年に守義爲親契活動を展開した。翌年 1923 年には、倍達青年会活動の一環として間島に移住した。1924 年に初めて投獄されたが、1926 年から中学講習所、講演会、読書会など所安学校で教育活動に従事した¹⁸。そのほかにも、1926 年サルジャ

会を組織し、日本へ渡って運動を展開し、この際にウィ・ギョンリャンも一緒に渡日した。1928 年には春景園共産党事件—正友会宣言で 2 度目の投獄となったが、このときウィ・ギョンリャンも一緒に投獄された。そして、1940 年代初期に鄭南局が所安民族解放運動の代表的な人物・宋乃浩の義理の妹キム・ドンゲと結婚したことから、二人は格別な関係であったと思われる。

1945 年 10 月帰国した鄭南局は、第 2 代莞島国会議員（1950.5-1954.5）を務めたが、ウィ・ギョンリャンについての記録は少ない。私たちはウィ・ギョンリャンと一緒に活動した人物があるのか、記念館を運営しているイ・デウク先生に尋ねた。展示を見たあと、ウィ・ギョンリャンの秘書がまだ莞島で暮らしているという話を聞いたので、私たちは次回にその方とのインタビューができるように頼み、宋乃浩の墓の方へ向かった。

私たちは再び所安島と古今面の訪問日程を立てた。2012 年 6 月 27 日、私たちは朝早くからソウルを出発して 5 時間以上かかる莞島へ向かった。所安島へ行く船は 1 時間に一便で時間を合わせる事が大事だ。やけに所安島へ行く波が高かった。私たちは、所安記念館のイ・デウクと途中で落ち合い、ウィ・ギョンリャンの秘書だったパク・サンオに会いに行った。パク・サンオの家は記念館から 15 分くらいのところにあって、その辺の道は狭くて、駐車するのにも苦勞した。私たちはパク・サンオに会った。1925 年生（87 歳）のパク・サンオは妻を看病しながら暮らしていた。90 歳に近いとは思えないほど、健康に見えた。彼の話は長く続かず、途切れてしばらくの沈黙、そして質問につながった。彼の記憶の中から、資料で名前だけが存在していた崔平山、ウィ・ギョンリャン、鄭南局、パク・ジョンスンなどの人物について語られてきた。

資料によって、ウィ・ギョンリャンとウィ・ギョンヨンといった、混同されやすい名前と関連する質問について彼は、「ウィ・ギョンリャンだろう」とはっきり答えた。真和委の資料を見ても朝鮮戦争直後、保導聯盟関係者の相当数は虐殺された。パク・サンオは所安郡保導聯盟事件

¹⁶ 李興刷は1931年全南運動協議会事件と32年瓮浦里干拓地小作争議に関わりを持ち、そして莞島郡農民協議会の古今面支部副委員長を務めた。彼は、チョン・オソプ（1948年射殺）、チョン・グァンテクなどと一緒に活動したと考えられる（진실 화해를 위한 과거사 정리 위원회 2010 : 585）。

¹⁷ 全南運動協議会事件については、박찬승（1995 : 178-184）参照。

¹⁸ 所安学校廃校反対運動の際に、鄭南局は日本で私立所安学校の復校同盟を組織し、文部省へ派遣された（김인덕 1997）。

の「唯一の生存者」であった。何年か前に莞島で行なわれた真相究明関連資料集を持ってきて見せながら彼は口を開けた。彼は自分がウィ・ギョンリャンとどういう関係なのかは最後まで言わなかった。ただ自分が見てきた朝鮮戦争前後の状況を語っただけだ。

パク・サンオとのインタビューの後、私たちは莞島邑へ戻った。翌日、莞島聖堂付近に住んでいる鄭南局の家族に会うためだった。夏に向かう夜の海は少し冷たかった。私たちは魚市場でメバルと一緒に焼酎を飲みながら、昼に会ったパク・サンオについて話しをし、一日をまとめた。翌日朝 10 時 30 分、私たちは鄭南局の息子チョン・ギタクに会いに行った。鄭南局は 1920 年代に所安島と民族解放運動の中心人物であった。ところで、資料を調査する中で、1945 年 8・15 解放以後から朝鮮戦争時期までの鄭南局の行跡について、ある疑問を抱いた。1929 年新義州事件までウィ・ギョンリャンとともに代表的な所安島出身の民族解放運動家であった鄭南局は、その時期の記録から消えていた。そのあと 1950 年第 2 代国家議員に無所属で当選された。短くて 5 年、長くは 15 年間の行跡の確認が難しかった。

私たちは電話をかけたあと、所安聖堂の裏の方にある小さな一戸建てへ入った。家には、チョン・ギタクさんご夫婦がいた。小さな家には二人が住んでいて、すぐ隣には姉のチョン・ミョンジンが暮らしていると言う。チョン・ギタクは少し認知症の症状があり、持続的に会話をするのが難しく、奥さんが横で手伝ったり、自分が聞いた話をしてくれた。2000 年代に口述証言をしたチョン・ミョンジンも似たような状況であると言う。鄭南局についてのチョン・ギタクの記憶は、ほとんどが日本に住んでいた時期に関するものであった。チョン・ギタクが繰り返して話をする港区（大阪朝鮮人居住地域）が、彼の記憶が戻ってくる時点のようだった。鄭南局が国会議員の身分で死亡したが、彼の家族は非常に苦しい生活をし、今も同様である。息子嫁のチョン・ギタクの婦人は、1955 年死亡した鄭南局が遺言として「子どもが多いからお餅売りでもやりなさい」ということばを残すほどであったと、当時の苦しい状況を語った。

チョン・ギタクは当時の新聞の切り抜きを見せながら父鄭南局について語り続けた。朝鮮戦争直前 1950 年 5・10 選挙で、鄭南局は莞島住民の推薦で無所属国会委員に当選した¹⁹。精米所でポスターを貼りながら、選挙運動を行い、鄭南局は相手のキム・ジャンリョルに勝った²⁰。チョン・ギタクの記憶における鄭南局と家族の生活は「日本警察」、「思想不純者」、「家宅搜索」などの単語によってとぎれとぎれとつながり、語られた。とくにチョン・ギタクが強調したのが「父は左翼ではない」、「労働争議法」というこの二つであった²¹。チョン・ギタクとの出会いによっても、鄭南局の「空いた時間」についての疑問が完全には解けなかったが、日本帝国時代、そして解放直後、鄭南局が莞島へ戻って味わったはずの苦労は十分想像できた。真和委資料によると、1950 年鄭南局国会議員選挙事務所の事務長を務めたキム・チョルグムは、鄭南局の選挙運動をしたという理由で、1950 年 8 月 29 日警察によって射殺された。それにとどまらず解放後、植民地期に民族主義活動をした人物は李承晩を支持しないという理由で、チョン・グァンテク、チョン・オソプ、ペ・ギソプ、キム・チョクム、パク・ソンギユなどは警察の監視と弾圧を受けた（진실 화해를 위한 과거사정리위원회 2010 : 588）。

鄭南局が社会主義者から「転向」したかどうかを確認することは難しいが、その可否とは関係なく、絶えず右翼によって「思想的な疑惑」に包まれただろう。思うには、もし 5・10 選挙で鄭南局が国会議員から落選し、釜山に避難することができなかったとすれば、鄭南局も莞島で内戦と死の渦巻きの中で自由にはなれなかつ

¹⁹ 彼らは無所属だと証言するが、新聞と選挙管理委員会の記録によると、鄭南局は国民党所属（莞島郡宣伝部長）として記載されている。

²⁰ 新聞記事によると、鄭南局（9,789票）、キム・ジャンリョル（9,233票）だった（京郷新聞1950年6月2日付）。

²¹ まだ戦争中だった1953年1月16日、釜山で開催された国会で、労働組合法の審議があった。チャン・ゴンサンなどは法案の原案として、労働者の地位向上のための組合結成を想定した。これについて、鄭南局は法律上の労働者の地位を保護する規定が弱くて、とくに政治活動に関わることができないようにしている点を問題とし、想定された労働組合法に反対した（京郷新聞1953年1月18日付）。

ただろう。すでに独立功労者になっている鄭南局であるが、息子チョン・ギタクは相変わらず「父に対する思想的な縛り」から自由ではないようだ。

私たちは、チョン・ギタクに会ったあとソウルへ戻った。所安と莞島邑での二度の出会いは、この事件についての思いをより複雑にさせたが、同時にその反対でもあった。初めて私たちをこの研究に導いたのは「光州」、「古今」、「所安」につながる「場所性」でもあり、1980年5・18からさかのぼる解放前後の時期でもあった。おそらくこれは私たちが追跡しようとした「時間性」を意味しているかもしれない。最後は「記憶の痕跡」を求めながら、私たちは1980年5月一家殺人事件とその事件についての記憶の間におけるパズルを組み立てようとしたかもしれない。当初、記憶の大きな痕跡はキム・テアム詩人のものであった。朝鮮戦争期に父を亡くした彼にとって1980年5月の事件は、家族と関連する事件でありながら、「東学—巖泰島—所安島—5・18」につながる大きな物語として理解された。小説を書こうとする彼にとって、これらの素材は「歴史小説」の材料でもあった。

しかし、私たちの場合、そうしたキム・テアムの問題意識に共感することはできたが、それより「この事件の実態に近づけられる手掛かり/兆候はいったい何なのか」ということに、より興味を持っていた。したがって、80年5月にチェ・ドッチュンの家族を巻き込んだことが何であって、なぜチェ・チョルは家族に銃を向けたのだろうか、そしてそれは事実だろうかについて焦点を当てた。そういう意味で「なぜチェ・チョルはチェ・ドッチュンに向けて銃を放ったのか」または「チェ・チョルが本当に犯人だろうか」についての疑問を、朝鮮戦争直後の家族史から考えなければならなかった。そのためには直系家族に会わなければならない。しかし、この問題はより一層気をつけながら接近しなければならない。それで、私たちはとりあえずキム・テアム詩人に会うことにした。

4 チェ・ワンジュとの出会い、より近く死のそばへ行く

事件の最初の目撃者であり、チェ・ドッチュンの妹チェ・ワンジュに会うためには、いくつかの中間橋を渡らなければならなかった。まず、この事件についての調査を提案したキム・テアム詩人にチェ・ワンジュを紹介してくれるようお願いをした。キム・テアム詩人を通して、そしてチェ・ミンホを経てチェ・ドッチュンの妹チェ・ワンジュとの出会いが可能なのかわかるだろう。2012年8月、私たちは京畿道安養のある食堂でキム・テアム詩人に会った。私たちは一家殺人事件の状況と真実に近づくためには、直系家族との後述インタビューが必要だと話した。彼は当事者に負担をかけることになるだろうが、8月か9月に光州へ行って、チェ・ミンホと同席してチェ・ワンジュに会おうと約束した。幸いにチェ・ミンホへの説得ができて、私たちはチェ・ワンジュに会う準備をした。一家殺人事件によってチェ・ワンジュの外傷が存在するかもしれないという心配にもかかわらず、私たちが彼女に会おうとする理由は直系家族以外に事件関連者を探ることができなかつたからだ。

この状況の中で、キム・ジョンハンから連絡が来た。チェ・チョルが監獄にいたとき、彼と親しかった人物についての資料を見つけたと、当事者にインタビューができるならば、チェ・チョルの殺人をめぐる問題の手がかりが見つかるかも知れないと言われた。その人がチェ・チョル関連記録を証言した韓国現代史史料研究所編『光州五月民衆抗争史料全集』（プルビッ、1989）によると、「防衛兵だったチェ・チョルという人は、鶴雲洞で自分の親を殺したという理由で死刑を求刑された。しかし、一緒に生活してみると死刑囚たちは人間本来の心に戻るが（チェ・チョルは一引用者）「絶対殺していない」と述べていた。母が継母だということで虐待され、その怨恨によって家族を殺害したと言われるが、他人が殺したのに息子の彼が悔しくも罪をかぶってしまったのだ。しかし（1980年当時—引用者）軍法裁判は一審しかなくて、彼はそのまま南原で死刑された。無垢な人をそのように陥れて殺したのだ。私は無期徒刑を渡され、刑務所へ送られた」と記録されている²²。

²² 当時証言者はホ・ヨンソプ（1957年生、当時23歳、

事件の手がかりを持っている人物らが既に死亡した状況で、5・18 直後のチェ・ Chol について、過去の証言資料集に文章を載せたこの人物を探し出した。しかし、ホ・ヨンソプは公開しにくい病気で、後述インタビューが難しい状況だった。彼は、文章や話だけで聞いたことがあった 5・18 関連者の外傷を患っていた。外傷後ストレス症候群 (Post-Traumatic Stress Disorder) は 1、2 次外傷で区分されるが、前者は 5・18 を直接経験して残った傷を、後者は知人が自分の傷を話すとき、生存者が「なぜ過ぎ去ったことを話す？」という反応を見せるとき感知される。とくに 2 次外傷は個人のトラウマから決定的に作動する。現在社会で 5・18 にうんざりしたという反応は、彼らの心に刺さる刃物のように近寄ってきて、彼らの生をより悲惨な形に陥れる可能性が非常に高い。このようにチェ・ Chol についての記憶を持っている当事者と会うことが難しくなり、私たちはチェ・ワンジュに会うために資料を整理するしかなかった。

9 月 26 日、まずチェ・ミンホへの口述インタビューを終えたあと、私たちは午後 3 時ごろ、光州市内にあるチェ・ワンジュの家に訪ねた。チェ・ワンジュの家は狭い道に沿って入っていくところだった。チェ・ミンホも久しぶりに訪ねるようで、道に迷いながらやっ行き着いた。チェ・ワンジュ一人暮らしの小さな家だった。初めて会うソウルの人間が、自分の家族史について聞きにくるということに対して、チェ・ワンジュはかなり負担だっただろう。それで、インタビューのはじめは、莞島出身者たちの親戚や周辺の人々の安否を聞く時間を必要とした。そして、キム・テアム詩人がやっ話を進めた。

キム・テアム：（この人たちは一引用者）政治学博士です。二人とも博士ですが。

チェ・ワンジュ：あら、ソウルの人みんな博士だね。

キム・テアム：5・18 事件についてずっと研究していたら、このようにおじ（チェ・ド

ツチュン一引用者）の話が出て、調べたら Chol（チェ・Chol一引用者）。Chol を。Chol が出たが、Chol について知っているのは一つもなく、Chol について研究していますが。Chol がなぜそうなったのか知りたくて、それだったらここによく知っている人がいる。

チェ・ワンジュ：5・18？

キム・テアム：はい、心苦しいでしょうが、本当に。それで、それについて話さなければなりません、なかなか難しいですね。ところで。

1934 年生（79 歳）のチェ・ワンジュにとって 80 年 5・18 はなんだったろうか。5・18 の話しに躊躇しながら、「5・18 の話になると私、本当に」とチェ・ワンジュは話を始めた。チェ・ワンジュにとって、5・18 は現在も「熱が上がって」、「のどが詰まる」体験であり、記憶である。私たちは、チェ・ミンホとキム・テアムから助けられながら、少しずつチェ・ワンジュの話を聞いた。まず、チェ・ドツチュンについてのチェ・ワンジュの記憶は二つの話で構成される。ひとつはチェ・ドツチュンのチェ・Chol に対する態度のことだ。繰り返されるチェ・ワンジュの話しを見てみると次のようだ。

父が（チェ・ドツチュン一引用者）そう（息子のチェ・Cholを一引用者）いじめていた。ほんと。いじめていた。「これからどうするつもりで、そこでも（麗水冷凍技術一引用者）耐えないで帰ってきたのか」と、父の性格でそのままほっとく性質じゃないから、それでずっといじめていて、その後は知らない。あの、その 5・18 になる前に（Cholを一引用者）防衛に行かせた。防衛を（チェ・ワンジュ、2012 年 9 月 26 日）。

そのあと何か事件が起きて、Chol が自分の父に強く、帰らないと（軍隊に戻らないと一引用者）、それで帰らないまゐると、父から殺されるようだったから。そんな状況だったよ。Chol が。それで、どう

いう事故を起こしたのかわかりません。なぜ起こしたのか、わたしは、そこまでは。ただ、チョルが自分の父からよく苦しめられたことはわかります。私が。そのとき（チェ・ワンジュ、2012年9月26日）。

母（継母キム・ソレー引用者）は、母が継母ではなく父（チェ・ドッチュン引用者）が継父だった。私がそのとき。それでそう言ったら。私が兄にもあれこれ言い出して（チェ・ワンジュ、2012年9月26日）。

「いじめ」、「抑圧」、「強く」、「殺される」、「継父」などの単語を用いながらチェ・ワンジュはチェ・ドッチュンの息子に対するしつけが厳しすぎだったと話した。これは先のチェ・ミンホとも同じだった。チェ・ミンホも当初の新聞記事などに記録された「継母の差別」という事件の原因について否定した。継母のキム・ソレより、チェ・ドッチュンのほうが「継父」に近かったようだ。チェ・ドッチュンとチェ・チョルのすぐ隣に住みながらこれらを目撃したチェ・ワンジュの繰り返される話からはその深さが想像できる²³。

チェ・ワンジュのチェ・ドッチュンについての記憶のもうひとつは「戦争」である。前述したようにチェ・ドッチュンは1948年そして1950年二回にわたって生死の瀬戸際に立たされた。チェ・ワンジュが「兄が戦争をたくさん経験しました」と言ったのは、賢かったチェ・ドッチュンが生きのびるためにいろいろ苦勞をしたという兄についての「弁護」でもある。チェ・ミンホが何回かチェ・ドッチュンの「道理に合わない行為」について指摘したのに比べて、チェ・ワンジュはチェ・チョルに対する兄のしつけについては行き過ぎだったとは言いながら、直接的な非難はしなかった。彼らの話を少し対照してみると次のようである。

だけど（二人の妹が命を懸けてチェ・ドッチュンの命を助けたが一引用者）、それは

兄だと言っても、兄が（妹たちに一引用者）道理に合わなかったです。なぜ、できなかったかと言うと、妹二人がつまり自分の命ということです。自分の命なのに、妹にはよくしてあげなかったのです。いつも妹のことを心配し、頭をなでてあげても足りないのに、あまり大事にしなかったです。ことばも温かくなかったし、その理由をあまりわからない（チェ・ミンホ、2012年9月26日）。

あの 6・25 が起きなかったらたぶん（兄は一引用者）何をやってもやってたはずだ（重要な地位に就いたはずだ一引用者）。なぜならば、6・25 のときここで学校へ通っていたけど、まあそこで誰でも捕まえて殺してたらしい（チェ・ワンジュ、2012年9月26日）。

これは、「6・25 が起きなかったら」という前提で、チェ・ドッチュンが朝鮮戦争をめぐる左・右翼政治勢力間の葛藤に巻き込まれなかったら、「重要な地位」に就いたはずだというチェ・ワンジュのことばからも確認できる。それくらい、チェ・ドッチュンはチェ家の期待を背負った人物であり、頼るべき人物であった。チェ・ミンホとチェ・ワンジュなどの口述によると、チェ・ドッチュンの家族は3男4女だった。チェ・ドッチュン事件以後、家族はかなり苦勞した。チェ・ワンジュは朝鮮戦争直後、チェ・ドッチュンが逃げているとき、検挙され銃で脅かされ、5・18 以後には夫と子供たちが取り調べのために連れて行かれ、夫は職場から解雇され、家庭状況は急に悪くなった。チェ・ドッチュンの兄チェ・サンチュンは日本留学生出身で、莞島で教師として仕事をしていたが、朝鮮戦争の直後、警察に拷問を受け、そのあとソウルへ行き、飴売りになった。チェ・ドッチュンの従姉チェ・ミンソンは朝鮮戦争期に公務員だった夫が附逆嫌疑で右翼警察によって殺害されたという痛みを持っている。彼女は暗い山の中、姿が区別できない屍の山の中から自分の夫が着ていた服を思い出しながら、夫の死体を探し回った記憶を、

²³ 1975年ごろチェ・ドッチュンは鶴雲洞に大きな家を二軒建てて、一軒は自分の家族が、隣の家は結婚した二番目の妹チェ・ワンジュの家族を光州へ呼び出して、暮らすようにした（김정환2013: 375）。

胸の奥深い所に潜めていた（김정환、2013：388、392）。

このようにチェ・ドツチュン事件によってチェ家は「バラバラ」になった。妹たちは戦争のとき、チェ・ドツチュンを守るため死も覚悟した。家族みんなが苦痛を味わったが、チェ・ドツチュンは光州に引越しをし、時代を読みながら自分の生存のために尽くした。従弟のチェ・ミンホはこれを「道理に合わない」と表現したが、チェ・ワンジュはチェ・ドツチュンを理解しようと今も努力しているように見える。大きな財産ではないが、光州で安定的に家族をまとめるようになったチェ・ドツチュンは、息子チェ・ Chol が自分の力で生きていけるように「厳しい訓育」をしたかもしれない。1970 年代にチェ・ Chol に「これから中国がアジアの中では最強国になるかもしれない。そう言いながら、中国語（語学院—引用者）に行かせると（チェ・ Chol の未来が一引用者）良いだろうと、中国語（教育をさせよう—引用者）した」（チェ・ミンホ、2012 年 9 月 26 日）と、中国語や冷凍技術などを無理矢理にでも習わせようとした。当時には、植民地と戦争を経た 1928 年生の韓国人男性が、自分の子供を訓育する過程でそれほどめずらしいことではなかったかもしれない。もしチェ・ドツチュンがチェ・ Chol に「愛情」すらなかったら、厳しい訓育をする理由もなかったはずだ。そのまま「放任」しただろう。

生き残ったチェ・ミンホとチェ・ワンジュそして亡くなったチェ・ドツチュンにとって、「戦争」は生涯すべてを覆い包む体験であった。私たちは、彼らの口述の中に込められているこうした兆しをいくつか掴まることができた。まず、チェ・ミンホの朝鮮戦争に関する口述の一部を見てみよう。

5・18（朝鮮戦争期の誤り—引用者）のとき、思想はなかった。しなかった、絶対。それが（ドツチュン兄が一引用者）幼かったときのひとつの火遊びだったと思われる。絶対（左翼—引用者）思想のようではありませんでした（チェ・ミンホ、2012 年 9 月 26 日）。

最初、話を聞いている途中、私たちは「なぜ 6・25 と 5・18 を混ぜながら話すのか」と疑問を抱いたが、「錯誤」だろうと簡単に無視した。しかし、チェ・ワンジュの 5・18 についての話を聞いている間、チェ・ミンホの話は、ある意味「無意識的な錯誤」かもしれないと思われた。チェ・ワンジュにとっても 80 年 5・18 は「戦争」だった。それぞれ 1930 年生、1934 年生で、朝鮮戦争を直接体験した二人にとって戦争は 1980 年まで終わらなかった。「一週間でひっくり返された」、「避難」、「布団」などインタビューで無意識に出たことばは、朝鮮戦争のときの恐怖と体験を 80 年 5 月に再び味わったと見ても良いだろう。彼らにとって国家権力の恐怖をはじめて体験した朝鮮戦争と、30 年経ったあと再び国家権力によって市民が虐殺される 5・18 という状況は「似たものとして」近寄ってきたかもしれない。チェ・ワンジュの 5・18 の話しを見てみよう。

あれこれして、私が苦勞をして、すごく。いままでもそれ、それだけが（80 年 5・18—引用者）思い出すとただ体が震えるだけよ。ただ・・・ただ熱が出る。熱がぐっと上がってくる（チェ・ワンジュ、2012 年 9 月 26 日）。

チェ・ワンジュ：5・18 が、戦争が過ぎると自分も（チェ・ Chol—引用者）まあ、自分の父（チェ・ドツチュン—引用者）に殺されるかどうか、話だけでは、まあ。そうなる。

面談者：あ、父の話を聞かず（軍隊に—引用者）戻らなかったから？

チェ・ワンジュ：戻らないままそうしているから。あ、あの兄が（チェ・ドツチュンが一引用者）戦争をたくさん経験したでしょう。銃がその時は（80 年 5・18 当時—引用者）溢れていたから。どこで拾ってきたのかそれはわかりませんね。だから、銃がその時はあちこち溢れていたから、どこで持ってきちゃったんだろうか（チェ・ワンジュ、2012 年 9 月 26 日）。

私たちもそうだったが、その子供たちがまあ、親戚の子供たちが二人も（我が家へ一引用者）来た。大学に通う子と、高校へ通う子、二人がまた家に避難してきて。またそれまた。長男の友達、一緒に学校へ通う者がまた一緒にここへ来ていて（チェ・ワンジュ、2012年9月26日）。

彼らに 80年5・18は朝鮮戦争と似ている「戦争」、「避難」で記憶されている。もちろん彼らの5・18についての記憶は「現在化」されているものである。言い換えると、現在までも恐怖、死、虐殺そして生きるための避難として二つの事件が重なって記憶されているのだ。徐々に私たちはチェ・ドツチュンが銃を持って家に戻ったチェ・ Chol を叱ったことが、まったく理由がない行動ではなかったことを理解し始めた。朝鮮戦争を前後に二回の死の瀬戸際に立たされたチェ・ドツチュンにとって小銃を携帯し、市民軍に加担した1980年5月の息子チェ・ Chol の行動は、「危険に満ちたこと」として思われただろう。これは思想や理念を離れて、本能的で無意識的なことであっただろう。80年5月25日。チェ・ Chol がカービン銃を持って家に帰ったときチェ・ドツチュンは激しくチェ・ Chol を追い込んだ²⁴。隣に住んでいた妹チェ・ワンジュは当時を次のように語る。

（Cholを一引用者）防衛に行かせたが、5・18が起きた。起きたが、5・18が起きたから。家に来ました。それで、Cholが来たから兄は、お前は死んでもそこに（軍隊一引用者）いなさい。軍隊にいなさい。ここには（家には一引用者）来ないで軍隊に行きなさい（と命令したよ一引用者）。なのに、こいつが（チェ・ Chol一引用者）行かなかった。軍隊に戻らなかった。（中略）防衛に行かなければならないのに、訓練を受けず帰って来た。それで来たから兄があれこれ言ったんだよ。だから、おまえ

はそこへ行かなければならないと。行かないでここにいるといけないからそう言うでしょう、まあ（チェ・ワンジュ、2012年9月26日）。

だから。（朝鮮戦争を経た私たちは一引用者）後のこと、まあ、後のことを考える。

（なのに、Cholのような一引用者）子どもたちは後のことを考えもしないでしょう。

後のことを分らない（チェ・ワンジュ、2012年9月26日）。

チェ・ワンジュの記憶から考えると、チェ・ドツチュンは軍人身分のチェ・ Chol が軍隊に戻ったら、5・18という戦争から一番安全になるだろうと考えたかもしれない。30余年前、自分が古今支署に火を付けて、人民委員会に参加したことが自分と家族の命を危険に合わせたように、チェ・ Chol の「後のことを考えない」行動が、チェ・ Chol 自身と家族を「再び」危険に陥れるかもしれないと直感したかもしれない。これが、私たちがチェ・ワンジュの口述を聴いて推定した当時の状況である。決して、1980年事件当時、チェ・ドツチュンが「理由なく」チェ・ Chol を追い詰めたことではないと考えられる。

しかし、私たちは一家殺人事件をめぐるもっとも核心的な問題を解けることまでは至らなかった。これはほかならぬ一家殺人事件がチェ・ Chol が犯したかどうかということである。この問題を解くための核心的な難しさは「証拠」がないという事実である。チェ・ Chol が犯人とされた理由は、隣に住んでいた人が「防衛服」を着て銃を発射したのを目撃したという陳述があったからだ。この陳述以外に、だれも事件現場でこの事件を目撃した人はいない。当事者たちはみんな死亡して、チェ・ワンジュも事件が発生したあと、現場を最初に発見しただけだ。ここで解決できないのが、チェ・ワンジュが伝えるチェ・ Chol の無嫌疑主張である。チェ・ワンジュのことばを借りると、

だから、そのときこのように（警察が一引用者）現場調査に来ました。それで、私が

²⁴ 5月21日正午、戒厳軍の無差別銃撃に対抗し、市民軍が本格的に武装し始めたのは5月21日午後だと言われている。この日、光州公園の前で武装示威隊員にカービン小銃と実弾を配っていた（김정환2013: 379）。

「チョル、チョル本当にお前がやったのか」と聞くと「おばさん、私じゃないよ」と言ったよ。自分がやったのではないと言ったよ。それで、やらなかったと言ったら、誰かに何かの証拠が必要だと言われたと言いました。それで、私がお金、五千ウォンを（チェ・チョルの一引用者）ポケットに入れました。「チョル、これ持って行って何か買って食べて」とあげたら、必要ないと、お金が。お金が要らないと言ったんですね。それで、チョルが持って行ったか、私が返してもらったかそれは覚えていません。要らないと、お金が。そう言いました。そして、その後は（チョルを一引用者）会えませんでした（チェ・ワンジュ、2012 年 9 月 26 日）。

もちろんチェ・チョルの無嫌疑主張も証拠はない。状況上、チェ・チョルが事件にもっとも近かったと推定するだけだ。私たちはチェ・チョルの行跡と関連していろんな可能性を残した。まず、当初の新聞記事に出たチェ・チョルと 3 人の青年が事件現場にいた可能性だ。80 年 5・18 当時を取材した記者キム・ヨンテクの取材資料によると、チェ・チョルは「父が自分の面倒は見ず、継母とその間の子供の面倒だけを見ていることに不満を抱き、友達 3 人と一緒に犯行を犯したと自白」したと記録している（キム・ヨンテク、2010）。しかし、目撃者がいない状況で、この可能性は高くない。二つ目にチェ・チョルが実際に殺人を犯した場合だ。目撃者の証言と銃を家に持ってきた当事者がチェ・チョルという点が、この推論の可能性を高めるが、ただこれも一つの可能性に過ぎない。最後の可能性としてはチェ・チョルが犯人ではないという推論である。常識に判断すると、チェ・チョルが、身分がすぐばれるような軍服を着て、家族に銃を乱射したという目撃者の証言がなかなか納得いかなかったからだ。当時戒厳軍と闘った市民軍さえ覆面をかぶって私腹を着た状況だったのに、肉眼で区別が出来るような防衛服を着て、チェ・チョルが事件を起こしたということには再考の余地があると判断した。さらに、事件が起きた時間は夜明けの 4 時だった。その

時間に軍服を着た姿を肉眼で明確に区別することが可能なのかについても相変わらず疑問が残った。それで、私たちは三番目の仮説について何回か話をした。そして、先述のホ・ヨンソプの証言を通じて手掛かりを探そうとしたが、不可能だった。また、裁判記録と判決文も軍事裁判であるということで、第三者の接近が不可能だった。結局 2012 年 10 月、事件の事実的な真実性はまだ解けない宿題としてそのまま私たちに残っている。

5 再び事件と向き合って

最初、私たちは 1980 年 5 月一家殺人事件の手掛かりを、朝鮮戦争前後に起きた莞島での事件や人間関係を手掛かりとして再構成しようとした。これに基づいて、今回の研究では研究者たちの歩幅そして現場と口述者の記憶に沿って、冷戦、朝鮮戦争そして 5・18 へつながる場所、時間、記憶がどのように再現されているのか「復記」しようとした。

私たちを最初莞島と光州へ導いたのはキム・テアム詩人の手掛かりだった。この研究の出発は、虐殺と戦争についての彼の幼年期のかすかな記憶と歴史的な想像力から始まった。さらに、私たちの莞島訪問は一家殺人事件という悲劇の出発が内戦と戦争、そしてその中の家族史という「心証」をもたらせた。とくに、チェ・ドツチュンの生涯を追いながら、植民、冷戦と内戦と虐殺、生存と離婚といった、1920 年代に生まれた人々の韓国現代史における「見慣れた生涯史」の発見も出来た。

また、ウィ・ギョンリャンと鄭南局を追っていくプロセスで「記憶する者の現実」も感知した。すでに、真和委の調査報告書が出たが、戦争について記憶することはとてもはばかりがある。2012 年に戦争と内戦を記憶しようとする人々の話を聞きながら、私たちは「果たして莞島が解放の島であると呼ばれるだろうか」と問いかけた。莞島と光州で私たちが会った人々は相変わらず沈黙とズレの中で、記憶すること自体を躊躇しているように思われたからだ。

チェ・ドツチュンとチェ・チョルにつながる 80 年 5 月 26 日事件で「なぜ」という質問はいまだに推論であり、「ただそれらしき手掛かり

だけをつなげる水準」であることを告白しなければならない。私たちは「チェ・ Chol が真犯人なのか、なぜそうだったのか」について明らかにすることができなかった。キム・テアム詩人の提案から始まって、5・18 と莞島での内戦プロセスの手掛かりを経て、冷戦、朝鮮戦争、莞島そして 80 年の光州を体験した場所、時間、人物を私たちはぐるぐるとくすぶった。いまだに、果たして研究者としての私たちが、5 月 26 日一家殺人事件という事件の真実究明だけに、この問題を扱うべきかどうかについてまだ疑問が残っている。

この文章に登場したチェ・ドツチュン、チェ・ Chol、チェ・ミンホそしてチェ・ワンジュなどはみんな冷戦、朝鮮戦争、そして 1980 年 5・18 で非可視的であり、自分の声を持っていない民衆であった。民族解放運動、5・18 の市民軍もしくは民主化運動の闘士（社会運動活動家を指すことば）は組織された運動を通じて自分の声を持っていて歴史に記録された存在である。しかし、チェ・ドツチュンそして一家殺人事件は、国家暴力に抗った 80 年 5・18 の歴史化過程において記録されない存在であり、チェ・ミンホとチェ・ワンジュは「語られない存在」であった。私たちは、1980 年 5 月一家殺人事件を通じて、1980 年 5・18 光州でまだ語られていない存在、そして冷戦、朝鮮戦争から 5・18 につながる家族史を通じて、声を出せない民衆の記憶を再現しようとした。

私たちはこの冬、再び莞島を訪れるつもりである。そこで、また戦争と内戦の記憶を聴き、その過程で事件の実態により近付けられるかもしれない。しかし、「残るもの」は何であるだろうか。それは、これからやっていく宿題でもある。それだけではなく、韓国という「一国史」という境界を越えて、「沈黙する民衆」の交差する声を再現しなければならない宿題も残している。

<参考文献>

- 김영택 (2010) 『5월 18일, 광주—광주민중항쟁, 그 원인과 전개과정』 역사공간.
김인덕 (1997) 「민족해방운동과 정남국」 『사림』 12·13 호, 성균관대학교.
김정한 (2013) 「5·18 항쟁 시기에 일어난 일가족 살인사건—전쟁, 학살, 기억」 『역사비평』 봄호.
김호균 (1993) 「해남 완도의 ‘나주부대’ 양민학살사건」 『월간말』 8 월호 (통권 86 호) .
박찬승 (1993) 「일제하 소안도의 항일민족운동」 『도서문화』 제 11 집.
—— (1995) 「일제하 고금도의 항일민족운동」 『도서문화』 제 13 집.
—— (2001) 「일제하 완도 (體島) 의 항일민족운동」 『지방사와 지방문화』 역사문화학회.
소안항일운동사료편찬위원회 (1990) 『소안항일운동사료집』 소안항일운동기념사업회.
손형부 (1992) 『植民地時代 宋乃浩·琪浩 兄弟의 民族解放運動』 國史編纂委員會.
송윤경 (2007) 「소안도 항일운동사, 전설에서 역사로」 『뉴스메이커』 경향신문사.
이균영 (1989) 「해방의 땅 소안도」 『사회와 사상』 3 월호.
진실·화해를 위한 과거사 정리위원회 (2010) 「완도군 민간인 희생사건」 『2009 년 상반기 조사보고서』 3 권.
한국현대사사료연구소 편 (1990) 『광주오월민중항쟁사료전집』 풀빛.

(きむ うおん・韓国中央研究院)